



平成29年度「教育課程実践モデル事業」実践研究校中間報告会及び研究授業を、外部から多くの参加者も得て、1月25日(木)の午後、本校視聴覚教室を主会場に開催しました。

目的は、本校の進める教育課程実践モデル事業についての中間報告を行い、研究内容を検証すること。また、本校の研究主題を踏まえた研究授業をとおして「生徒の主体的・能動的な学び」を実践し、今後の授業改善等に役立てることでした。

第11号では、研究授業及び授業研究の様子を紹介しましたが、今回は、中間報告会の特集第1弾です。主に運営指導委員の先生の講評を紹介します。

**中間報告会 (15:20~16:50)**

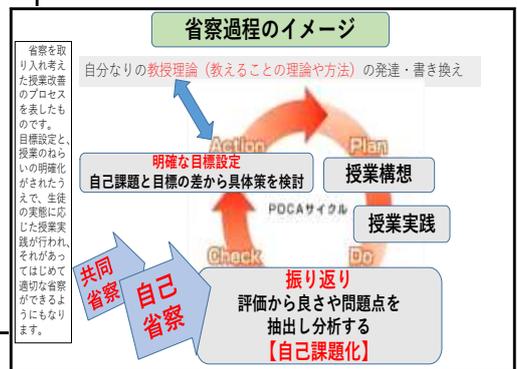
- ①実践についての中間報告  
全体報告及び各教科(英・数・国)の報告
- ②中間報告に関する協議  
テーマ 全体反省の①(下の全体報告の説明スライド参照)  
「今年度は、特に英国数の担当者を中心に取り組んだが、その取り組みをカリキュラム・マネジメントを働かせて、いかに教科全体、さらには学校全体に浸透させていくか。」

(下の写真は数学科の中間報告の様子)



**「教育課程実践モデル事業」全体反省**

- ①今年度は、特に英国数の担当者を中心に取り組んだが、その取り組みを、**カリキュラム・マネジメント**を働かせて、いかに教科全体、さらには学校全体に浸透させていくか。
- ②エビデンスを確かなものにしなが、いかに**共同省察**を深めて、教科で得た課題を全体の課題としてとらえていくか。
- ③授業の「問い」と、評価の一つとしての試験の「問い」を、どう有機的に連動させていくか。
- ④授業改善において、授業のねらいから振り返りまでの流れ、広義では学習指導案などを、どこまで学校で統一していくか。



**③運営指導委員による講評及び本校校長によるまとめ**

(上・下は全体報告の説明スライドより)

**【森先生(関西大学教授)】**

こうした実践をしていく上で、教員の共有がとても大切である。他者の力を借りて学ぶという図式は教員も同じである。変化の激しい時代は必ずやってくる。その時、卒業生が「東高でよかった」と思える学校になるようにしていく使命がある。「教育改革は島根から」は可能であると思うので、それを運営指導委員として支援していきたい。まずは、先生方が「教える」と「学ぶ」の違いを共同省察してみましょう。

**アクティブラーニングの段階? (学習の流れ)**

- ①**目標(めあて)・中心発問・学習課題の提示**  
～なぜだろう? どうしてだろう?～
- ②**個人思考**<課題解決の見通しを立てる> → 課題と向き合う
- ③**ペア・グループ学習**<考えの交流>  
～そうか!～
- ④**全体での学び合い**<課題解決へ>  
～なるほど!～ ※もたれあい×
- ⑤**まとめ・振り返り**<価値づけ>  
→ 課題を通して自分と向き合う

みんなの問いへ



**「勉強」と「学ぶ」の違いは?**

★教師の3つの役割  
**わかりやすく教える → じっくり考えさせる → 価値づける**

\*「先生の授業はわかりやすい」は最大の誉め言葉ではない?!

### 【高旗先生（岡山大学教授）】

今回の数学の研究授業では、作問演習がテーマであった。作問演習を単元のまとめや節目に入れることは意味のあることである。学習には、習得・活用・探求の3スタイルあるが、作問演習は活用にあたる。習得した基礎・基本のうち、何を価値あるものとして考えるかを明確にして、活用に進むことが大切となる。したがって、作問演習を実施することは、教師の単元構想力が問われることにもなる。

また、どういう問いであれば、教師が納得できるゴールに到達していると判断できる学習活動になるかを考え、目標設定やその評価も明確にしておく必要がある。また、生徒と教員双方が、「良問」とはどのようなものか共通理解をしておく必要もある。例えば、全員が解ける問題、多様な解き方が想定できる問題、一つの解き方しかない問題など、様々な問いが設定できると思われる。作問演習なら、パフォーマンス評価は必ず行わなければならない。基準を定めて、ループリックの作成を行う必要がある。

授業での全体発表は、やめてもよい。形式的になるだけなら、発表しないほうが良い。時間が余ったから発表を行うとか、時間の終わりに形式的に振り返りをするのもやめたほうがよい。振り返りを価値あるものにするためには、学習を進行させていくそのプロセスの中に振り返りが入っているのがよい。

### 【猫田先生（島根大学准教授）】

今年度実践された英・数・国の抱える問題はそれぞれ異なっているが、共通点は、知識・技能をしっかり身につけることであった。「生徒がどのようになるのがゴールか」を想定することが大事である。例えば、英語なら「〇〇の場面で、△△と言える。」など。それがあれば、この単元の中で、どこを精選していけばよいかをはっきりしていく。教育は時間との闘いであり、精選の必要性がある。パフォーマンス評価も、ゴールを想像することが近道かもしれない。

他の力を借りて協同、と言われるが、そのゴールは個の力をつけることを忘れてはならない。

### 【御園先生（島根大学准教授）】

多くの校内外の先生方が参加された今回の研修はすばらしい。自信をもってこの事業を続けて欲しい。

公開授業で、前半に先生がずっと喋られていた授業があったが、前時にこの話に触れていたのであれば、話の内容を生徒に尋ねて言わせても良かっただろうし、すでに全て読んでいる生徒もいたと思う。大学でもコミュニケーション力をつけるために、入学後すぐに友達づくりをさせたり、演劇をさせたりしようとする大学もある。そのような大学がある中、高校の授業でも、コミュニケーション力をつける授業に取り組んで欲しい。

学習指導案の中に、「活動の方法（学習活動の内容）」が記載されていることは多いが、「生徒の思考」を入れていくのも一つの方法である。

最近の生徒は、授業を一つのコンテンツとしてみている。「この授業（コンテンツ）はつまらない、もっとわかるコンテンツがネットで映像配信されている」、というように捉える。授業でしかできないこと、授業だからこそできることを大切にしたい。

### 【上代先生（松江市立第二中学校長）】

中学校での「めあての明示・協同学習・振り返り」は、小学校からの流れもあってすでに定着してきている。ただし、グループ活動を行っても「活動ありき」になっていて、それを個々の学力に落とし切れていないという課題が一方にはある。

スポーツでは、試合をしてからパス練習する方法（全習法）と、パス練習のあと試合をする方法（分習法）とがある。今回の作問演習は、後者であったが、作問後に計算練習などをする前者の方法もある。

教員はロジカルに物事を考えることが求められる。生徒にわかりやすく説明することを求めておきながら、教員の話が長すぎてわかりにくい、ということはよくある。教員がロジカルに無駄なく話すことで、残りの時間を生徒の活動に充てることができる。

\*[解説] 「全習法」は、課題を一つにまとめ、最初から最後まで通して練習する方法。「分習法」は、課題を分けて一つずつ克服していく方法。「全習法」の長所は、様々な課題を一気にやり切る実力がある場合、効率・効果とも高いこと。短所は、最終的な目標までの見通しがききにくいことからモチベーションを保ちにくかったり、達成度合いやつまづいている箇所を確認しにくかったりすることがあるようです。

### 【永瀬校長】

「生徒が変わる、生徒を変える」。そのために「教師が変わる、教師を変える」。校長としての視点だと、「学校が変わる、学校を変える」。前校長が作った本校のランドデザインを引き継いだ。それをこの2年で実行に移すことを前校長と約束した。このモデル事業はその実行の一つである。今年度は、3教科に絞った実施であったが、来年度は学校全体に広げていきたい。先生方が地道にまじめに取り組まれる姿勢や成果が地域に伝わり、それが学校の一つの特色となり、選ばれる学校にしていきたい。